



8. 妊娠後期に発症した opsoclonus-myoclonus syndrome (OMS) の一例(第47回岐阜臨床神経集談会)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-07-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 林, 祐一, 桧山, 善次郎, 保住, 功, 橋爪, 龍磨, 西田, 浩, 犬塚, 貴, 野々田, 岳夫, 青木, 光広, 伊藤, 八次 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/12440

5. 脳脂肪塞栓の1例 —MRIによる画像診断—

朝日大学村上記念病院 脳神経外科 整形外科*

渡會祐隆, 山田実貴人, 久保田芳則, 安藤 隆,
小見山洋人*

【要約】脂肪塞栓症候群は骨折後に生じる重篤な合併症の一つで、呼吸器症状、中枢神経症状、点状出血などを生じる疾患である。今回我々はMRI等の画像によって診断し得た一例を経験したので報告する。【症例】78歳男性。透析患者さんで転倒し、左大腿骨頸部内側骨折をきたした。当初軽度の構音障害のみで、頭部CT上明らかな病変は認めなかった。その後、意識レベル低下し、III-2となり、四肢麻痺もみられた。第2病日、眼球結膜に点状出血を認めた。第4病日、頭部MRI T2WI, DWIで両側大脳半球白質を中心にびまん性に高信号域を認め、脳脂肪塞栓と診断した。その後、点状出血の消失、意識レベル、四肢麻痺の改善傾向を認めた。第36病日のMRIでは高信号域はほぼ消失していた。心エコーは異常なし。肺血流シンチにて右肺野に一部欠損像を認めた。現在患者は意識清明、左大腿骨頸部の人工骨頸置換術を受けリハビリ施行中である。

6. てんかんとしてフォローされていた偽性副甲状腺機能低下症の2例

岐阜大・医 小児科, 名古屋徳州会病院小児科*

堀越啓子, 寺本貴英, 青木雄介, 船戸道徳,
伊上良輔, 金子英雄, 下澤伸行, 近藤直実,
田下秀明*

今回当科にて、てんかんとしてフォローされていた偽性副甲状腺機能低下症の2例を経験した。症例1は5歳女児で、低Ca血症とCT上基底核を含む広範囲の石灰化を認め、またAlbright体型を認めていた。Ellthworth-Howard試験の結果、身体所見とあわせて偽性副甲状腺機能低下症Ia型と診断した。症例2は11歳男児で、同様に低Ca血症とCT上基底核を含む広範囲の石灰化を認め、Ellthworth-Howard試験の結果偽性副甲状腺機能低下症Ib型と診断した。小児では自覚症状の訴えが難しく、痙攣発作、テタニー発作等にて発見されることが多く、てんかんと鑑別が重要である。

7. 失語・右麻痺にて発生し、左総頸動脈閉塞を認めた若年性脳梗塞の1例

県立岐阜病院神経内科 脳神経外科*

清水洋孝, 山田 治, 清水 勝, 岡田 誠*,
服部達明*

症例は22歳女性。2002年5月5日午後10時頃に発語困難と右片麻痺が出現、当院救急救命センターに搬送。意識はJCS 1レベル、自発語なく指示理解困難。右不全片麻痺。頭部CT上左大脳半球に広範囲のearly ischemic signあり。脳血管造影施行、左総頸動脈が造影されず、同部の閉塞が疑われ脳梗塞と診断、治療を開始。7日の

脳MRIで左中大脳動脈領域に梗塞を認め、2回目の脳血管造影で左鎖骨下動脈からの筋肉枝から左外頸動脈への側副血行路を認めた。Risk factorは認めなかった。3D-CTAngioでは、左総頸動脈の起始部が同定され、後天的な要因で同部の狭窄病変が閉塞、または側副血行路の閉塞により、発症した可能性が疑われた。症状は改善傾向にあるが、閉塞部のバイパス術など再発予防について現在検討中である。

8. 妊娠後期に発症した opsoclonus-myoclonus syndrome (OMS) の一例

岐阜大・医 神経・老年学分野

林 祐一, 松山善次郎, 保住 功, 橋爪龍磨,
西田 浩, 犬塚 貴

同 平衡・耳鼻咽喉科学分野

野々田岳夫, 青木光広, 伊藤八次

【症例】31歳、女性【主訴】浮動感、眼振、歩行困難
【現病歴】2002年4月19日(妊娠34週)浮動感、眼振を自覚した。5月4日症状増悪し歩行困難となった。出産後、当科に入院した。

【入院時身体所見】一般身体所見に異常なし。opsoclonus、体幹・四肢・顔面・舌のmyoclonus、体幹失調を認めた。

【検査】血液検査は特に異常所見はなく、腫瘍マーカー、抗神経組織抗体、ウイルス抗体価は陰性。髄液検査では細胞数(単核球)の軽度上昇を認めた。

【経過】特発性OMSと診断し、ステロイドパルス療法3日間、その後プレドニン60mgから漸減療法を施行、対症的にクロナゼパム少量投与を併用し、症状は軽快した。

【考察】これまで特発性OMSの病因として自己免疫的機序が想定されており、ステロイドが著効する例が多く、本例も有効であった。また妊娠中に発症したOMSの報告例は、本邦で2例しかなく貴重な症例と思われた。

9. Arnold Chiari I型奇形に合併する脊髄空洞症に対する後頭下減圧術の治療成績

岐阜大・医 整形外科

宮本 敬, 清水克時, 児玉博隆, 細江英夫

岐阜中央病院 整形外科

西元博文

県立岐阜病院 整形外科

飯沼宣樹

Arnold Chiari I型奇形に合併する脊髄空洞症に対する後頭減圧術(井須による硬膜外層切除)の治療成績を報告した。症例は1996年秋以降に当科において手術を施行し、術後MRIにて空洞の変化を18ヶ月以上観察し得た10例である。男性3名、女性7名、手術時年齢は6歳~72歳(平均34歳)であった。MRIにおける空洞の縮小は全例に見られた。上肢の痛み、しびれ感などの諸症状の軽快も全例にみられた。問題となる合併症はなく、安